

冰点

三浦綾子



氷点

三浦綾子



氷点

1965年11月15日 初版第1刷
1970年6月1日 新装版第1刷
1989年12月20日 新装版第46刷

著者 三浦綾子
発行者 八尋舜右
印刷所・製本所 凸版印刷株式会社
発行所 朝日新聞社

東京都中央区築地 5-3-2 〒104-11
電話代表03(545)0131 振替東京0-1730
〔編集〕図書編集室 〔販売〕出版販売部

©1965 Ayako Miura

Printed in Japan

ISBN4-02-253803-1

定価はカバーに表示してあります

目 次

敵	1
誘拐	12
ルリ子の死	22
灯影	30
西日	39
線香花火	44
チョコレート	55
雨のあと	63
回転椅子	71
九月の風	79
ゆらぎ	89
どろぐつ	99

行くえ	227
雪虫	210
台風	194
歩調	185
よそおい	176
白い服	160
青い炎	155
橋	142
激流	131
つぶて	126
雪けむり	120
みずうみ	111

堤防	355
写真	352
階段	344
雪の香り	329
赤い花	321
川	316
千島から松	292
答辞	283
淵	269
大吹雪	261
うしろ姿	255
冬の日	244

ね む り	遺 書	と び ら	ピ ア ノ	街 角
406	402	383	373	366

敵

風は全くない。東の空に入道雲が、高く陽に輝やいて、つくりつけたように動かない。ストロープ松の林の影が、くつきりと地に濃く短かかった。その影が生あるもののように、くろぐろと不気味に息づいて見える。

旭川市郊外、神楽町のこの松林のすぐ傍らに、和、洋館から成る辻口病院長邸が、ひっそりと建っていた。近所には、かぞえるほどの家もない。

遠くで祭りの五段雷が鳴った。昭和二十一年七月二十一日、夏祭りのひる下りである。

辻口家の応接室に、辻口啓造の妻、夏枝と、辻口病院の眼科医村井靖夫が、先程から沈黙のまま、向いあつて椅子に座っている。座っているだけでも、じとじとと汗ばんで来るような暑さであった。

突然、村井は無言のまま立ち上ると、大股にドアのところまで行って取手に手をかけた。

取手が、ガチャリと音を立てた。長い沈黙の中で、その

音が夏枝には、ひどく大きく響いた。

夏枝は思わず目を上げた。つややかな瞳に、長いまつげが影を落している。とおった鼻筋に気品があった。紺地の浴衣に、雪国の女性らしい、肌理こまかい色白の顔がよく映えている。

(さっきから、黙ってばかり……)

そう思いながら、夏枝は背を向けたまま立っている村井の、長身の白い背広姿を見上げて微笑した。つましやかな、整った夏枝の唇が、ほほえむと意外に肉感的に見える。それは二十六歳の若さの故ばかりではなかった。

先程から、村井が何を言いたがっているかに夏枝は気づいている。夏枝は、その言葉を待つ表情になった。そのような自分を意識しながら、旅行中の夫、啓造のやや神経質だが優しい目を、ふと思いついて出していた。

今年の二月であった。夏枝は、ストロープの灰を捨てるとき、灰が目に入って村井に診てもらった。その時以来、村井は夏枝から心をそらすことが、できなくなっていた。

無論それまで、院長夫人である夏枝を知らない訳ではない。しかし夏枝には、まともに顔を合わすこともできないような、関心を持つことすら憚られるような犯しがたい美しさがあった。

その夏枝が彼の患者となったのである。手術台の上の、

夏枝の角膜につきさききっている微細な炭塵をとりぞぎ、眼帯をかけ終ると、村井はかつてないふしぎな喜びを感じた。

「これですね、犯人は」

村井は夏枝に、ピンセットの先の小さな炭塵を見せた。

「見えませんか。あまり小さくて」

手術台の上に片手をついた姿勢で、夏枝は小首をかき上げて微笑した。

「これなら、見えますでしょう」

村井は白いちり紙に、ピンセットをなすりつけるようにして炭塵を移した。それを見る二人の頬がふれ合わんばかりに近いのを、村井は意識していた。

「まあ、こんなに小さいんですの。あんまり痛いものですから、どんな大きなゴミかと思いましたが」

眼帯をかけて片目になった夏枝は、遠近が定まらなかつた。定まらないままに、彼女はじっとゴミをみつめていた。二人の頬を寄せ合う時間が、少し長かった。

それから半月程、夏枝は通院した。彼女の目がかかなりよくなって、治療の必要がなくなっても、村井はだまって洗眼した。

「もうよろしゅうございますか」

ある日、夏枝がたずねると、村井は哀願するようなまなざしをした。

「もう一度、暗室でよく診なければ……」

少し声がかすれた。

暗室はせまかった。向き合って椅子に座っている二人の膝が触れた。診る必要はなかった。だが彼は、ゆっくりと時間をかけて診察した。

終ると村井は、食い入るように夏枝をみつめた。その真剣な目のいろに、夏枝はたじろいだ。同時に、胸の中にキユッと押しこんで来る、ふしぎに快い感情があった。だが夏枝は表情を変えなかった。

「ありがとうございます」

立ち上る夏枝の手を村井がつかんだ。

「行かないでください」

子供っぽい言い方がかわいいと思った。夏枝は、つつましく目をふせると、村井の手をそっとはずして暗室を出た。

それから村井は、時々辻口家を訪ねるようになった。しかし辻口家の幼い徹とルリ子に対しては、あまり言葉をかけなかった。

「村井さんは、子供がおきらいらしいですわね」

ある時、夏枝が言った。啓造がちょうどその場を、何か

の用ではずした時だった。

「子供がきらいというんでは、ないのですが……」

村井はちよつと皮肉に唇をゆがめた。冷たい、ニヒリスチックな表情であつた。

「でも奥さんの子は嫌いだな。嫌いというより呪いたい存在と言いますかね」

「まあ！ 呪うなんて……そんな……」

「奥さんは、子供なんて産んでほしくなかった」

村井の慕情の激しさに、夏枝は感動した。

今、ドアの前に立っている村井の後姿を見ながら、一カ月ほど前の、その村井の言葉を夏枝は思い出していた。

遠くで再び祭りの五段雷が鳴った。

取手に手をかけたまま、村井がふり返つた。その広い額がじつとりと汗にぬれている。やや、うすい唇が、もの言いたげにかすかに動いた。

夏枝は村井の言葉待った。

その言葉待つと言うことが、人妻の彼女にとって、どんなことなのか今は、夏枝は気づきたくなかった。

「どうして、ぼくに結婚なんか、すすめるんです？」

村井のたたきつけるような激しい語調に、長い沈黙が破られると、夏枝はかるいめまいをおぼえて、傍らのスタン

ドピアノによりかかった。

「奥さん！」

村井はピアノに寄りかかっている夏枝に近づいた。夏枝は、すばやく椅子から立ち上ると、うしろへ退いた。

「奥さん、あなたは残酷な方だ」

村井は夏枝の前に立ちはだかるように迫つた。

「残酷ですって？」

「そうですね。残酷ですよ。あなたは、さきほど、ぼくに縁談を持ち出したじゃありませんか。ぼくは、あなたがわかつていてくださるとばかり思っていた。ずっと以前から、ぼくの気持がよくわかつていらつしやつたはずだ。それなのにあなたは……」

村井はテーブルの上の写真を見た。夏枝がすすめた写真の女性は、笑声が聞えそうなほど無邪気な笑顔で、アカシヤの樹によりかかつて写っている。

村井は視線を夏枝の上にもどした。男にしては美しすぎる黒い瞳であつた。その目が、時々どうかすると虚無的に暗くかげることがあつた。その暗いかげりに夏枝はひかれらるものを感じた。

今、村井はややすきんだ暗い目で夏枝をみつめている。

夏枝はその村井の胸に倒れこみそんな自分を感じて目をふせた。

こんなふうには明らさまな口説くどきをきく日が、いつか来るように夏枝は思っていた。

今日縁談を持ち出したのも、村井に結婚をすすめるためではなく、夏枝に対する関心がほんとうのところ、どの程度のものかを、はっきり知りたいためかも知れなかった。

夏枝は、よくしなう美しい手を合わせて、拝むように胸のあたりに持って来た。そのしぐさが、ひどくなまめいて見えた。

「夏枝さん」

白いしつぱいの壁を背にした夏枝の前に立ちふさがると、村井は夏枝の肩に手を置いた。村井の手のぬくみが、浴衣を通して夏枝の体に伝わった。

「いけません。怒りますわ、わたくし……」

村井の顔が覆うように夏枝に迫った。

「村井さん、わたくしが辻口の妻であることを、お忘れにならないでください」

夏枝の顔が青かった。

「夏枝さん、それが忘れられるものなら……ぼくはそれを忘れない！ 忘れられないからこそ、今までぼくは苦しんで来たじゃありませんか」

村井の手が夏枝の肩を激しく揺さぶった、その時であった。廊下に足音がして、ドアが開いた。

ピンクの服に白いエプロンをかけたルリ子が、チョコチョコと入って来た。

村井はあわてて、二、三步夏枝から離れた。

「おかあちゃま、どうしたの？」

三歳のルリ子にも、大人二人の様子にただならぬものを感じとったらしく、いっばいに見ひらいた目で村井をにらんだ。

「おかあちゃまをいじめたら、おとうちゃまにいつてやるから！」

ルリ子はそういつて小さな手をひろげて、母をかばうように夏枝のそばにかけよった。

村井と夏枝は思わず顔を見合わせた。

「そうじゃないのよ、ルリ子ちゃん。おかあちゃまはね、先生と大切なお話があるのよ。おりこうだから、外で遊んでいらっしやいね」

夏枝は小腰をかがめ、ルリ子の両手を握って軽く振った。

「イヤよ。ルリ子、村井センセきらい！」

ルリ子は村井を真っすぐに見上げた。子供らしい不遠慮な凝視だった。村井は思わず顔をあからめて夏枝をみた。

「ルリ子ちゃん！ いけません、そんなことをいつて。村井先生は、おかあちゃまと大事なお話があるといつたでし

よ？ おりこうさんね、よし子ちゃんのお家へ行って遊んでいらっしやい」

夏枝は村井よりもいっそう顔をあからめてルリ子の頭をなでた。

もし、村井の愛を拒むなら、今ルリ子をひぎに抱きあげるべきだと夏枝は思った。しかしそれができなかった。

「センセきらい！ おかあちやまきらい！ だれもルリ子と遊んでくれない」

ルリ子はくるりと背を向けて応接室を飛び出して行った。エプロンの蝶結びが背中に可憐に揺れた。

夏枝はよほど呼びとめようかと思った。しかし今しばらく村井と二人きりでいたい思いには勝てなかった。

廊下を走るかわいい足音が勝手口に去った。何か心に残る足音だった。

「ごめんなさい、ルリ子が失礼なことを申しあげまして……」

ルリ子の出現が二人を近づけた。
「いや、子供って正直ですね。そして恐ろしいほど敏感なものですわね」

村井は、立ったまま煙草に火をつけながらいった。
「あなたはうちの子をおきらいでしたものね」

「きらいというのは、ちょっとちがうんです。徹くんに

しろ、ルリ子ちゃんにしろ、何かこう神経質な感じや、はればったような眼なんか、院長そっくりじゃありませんか。ぼくは院長と夏枝さんの子供だという、その事実には耐えられないんです。見るのも辛いことさえある」

村井は煙草を灰皿に捨てると、両手を深くズボンのポケットに入れたまま、熱っぽく夏枝をみつめた。

二人の視線がからみ合った。

夏枝が先に視線をそらした。彼女は静かにピアノの前に座ってふたを開いた。何を弾くというのでもなかった。両手を軽くピアノの上に乗せたまま夏枝はいった。

「お帰りになって頂けません？」

声が少しふるえた。夫も、女中の次子も、ルリ子もいないこの家の中で、何かが起るのを彼女は感じた。夏枝の体の中に、その何かを期待するものがあつた。その自分が恐ろしかった。

夏枝の言葉を聞くと、村井は片頬に微笑を浮べて、ピアノの前に座っている彼女のうしろに立った。

「夏枝さん」

彼はうしろから、ピアノの鍵盤におかれた夏枝の白い両手を上からおさえた。ピアノが大きく鳴り響いた。

思わずふり向いた夏枝の頬に、村井の唇が触れた。

「いけません」

心とは反対の言葉だった。村井は無言で夏枝の肩を抱いた。

「いけません」

村井の唇をさけて、夏枝はあごを深く衿にうずめた。唇だけは避けなければ、そのあとの自分に自信がなかった。

「いけません」

夏枝の頬を上に向かせようとしている村井に三度拒むと、村井は身をかがめて夏枝の頬に唇をふれようとした。

彼女はかたくなに身をよじって村井をさけた。村井の唇は夏枝の頬をかすめただけであった。

「わかりました。そんなにばくをきらっていられたのですか」

村井は夏枝の拒絶にはずかしめられた思いで、さっとドアを開けて玄関に出た。

夏枝は呆然として立ち上った。

(きらいなのじゃない)

拒絶は媚態であり、遊びであった。次に来るものをいつの間にか夏枝は待っていたのだった。二十八歳の村井にはそれがわからなかったのだ。

夏枝は村井を送りに出なかった。引きとめてしまえば自分が恐ろしかった。

村井の唇がふれた頬に、そっと手を当てた。その部分が宝石のように貴重に思えた。胸をしめつけるような甘美な感情があった。結婚して六年、夫以外の男性にはじめて口づけを頬に受けたことが、夏枝の感情をたかぶらせた。

夏枝は再びピアノの前に座った。キイの上を白い指が走った。ショパンの幻想即興曲であった。次第に感情が激して来た。夏枝は長いまつ毛をとじたまま酔ったようにピアノを弾きつづけた。

ちょうど、このころ幼いルリ子の上に何が起きていたかを、夏枝は知る由もなかった。

突然ピアノ線が鋭い音を立てて切れた。不吉な感じだった。

はっとした瞬間、

「ピアノ線が切れるまで弾くとは、またずいぶん御熱心なことだね」

いつの間にか夫の啓造が、いつものように優しい笑顔でうしろに立っていた。

「あら！ 今日でしたの」

夏枝は狼狽した。啓造の帰宅は明日の予定であった。ばつと頬をあからめて立ち上った姿がなまめいた。それが啓造には、夫の突然の帰宅を喜ぶ姿に思われた。

「だまって立っていらっしやるんですもの、いやなかつた！」
夏枝は啓造のくびに、その白いむっちりした両腕をからませて彼の胸に顔をうずめた。

今の今まで、村井靖夫を思つて上氣した自分の顔を、夏枝は見られたくなかつたからである。

啓造はふと、いつもとちがつたものを夏枝に感じた。今までの夏枝は、自分から啓造のくびを抱くというようなことはなかつた。

「暑いよ」

そういいながらも、しかし啓造は夏枝の背に腕をまわした。

啓造は学者肌で、神経質だがとげとげしいところが少なかった。もの静かで優しい夫であつた。信頼できる夫であつた。

夏枝は、夫の胸に顔をうずめながら、心が次第に安らかになつていった。先ほどの妖しく波だつた村井への感情が、今はふしぎだつた。嘘のようでもあつた。

(やっぱり辻口が一番いいわ)

そう思つた。夏枝は啓造を愛している。医者としても夫としても尊敬していた。何の不満もなかつた。

(それなのに、何故村井さんと二人でいることがあんなに楽しいのかしら)

夏枝にはそれがふしぎだつた。今はこうして、夫が一番いいと思つていても、再び村井に会うとどうなるか、自信がなかつた。制御できないものが、自分の血の中に流れているのを夏枝は感じた。

(おかあちゃまをいじめたら、おとうちゃまにいつてやるから！)

ふと、先程のルリ子の言葉を思い出して、夏枝はヒヤリとした。

「おつかれになつて？」

ルリ子の帰りが、なるべく遅いようにとねがいながら、

夏枝は夫を見上げた。

「うん」

啓造は、子供の頭を撫でるようにやさしく夏枝の頭を撫でた。パーマをかけない豊かな髪がころよく匂つた。彼は夏枝の髪にあごをつけたまま、何気なくテーブルの上を見た。

啓造の目が鋭く光つた。そこにはコーヒー茶碗と灰皿があつた。灰皿にある吸いがらを啓造は目で数えた。八本までは数えられた。

彼はひややかに妻をはなれた。

夫の氣配に夏枝はハツとした。

「ルリ子はどうした？ 徹も次子もないじゃないか」

啓造のきびしい視線は、なおテーブルの上にあった。啓造の表情に、夏枝は村井の来訪を告げそびれた。

「徹は次子に連れられて映画ですわ。ルリ子はその辺で遊んでいませんでした？」

「見なかった」

幼いルリ子まで外に追いやって、誰もいないこの部屋で、一体この煙草の吸いがらの主と何をやっていたのかと、啓造は探るような目になっていた。

来訪者が誰であったかを夏枝から先にいつてほしかった。啓造はピアノに片手をふれた。

ドミソ ドミソ ドミソ

指は同じ鍵をくり返していた。

何かやりきれなかった。夏枝は急に不機嫌になった夫に、ますます村井の来訪をいい出しかねた。

ドミソ ドミソ ドミソ

パタンと大きな音を立てて啓造がピアノのふたをしめた。ちょうど夏枝が灰皿とコーヒー茶碗を下げるところであった。

一瞬、啓造と夏枝の目が合った。カチリと音のしそうな視線であった。夏枝が先に目をそらして部屋を出て行った。ドアを出て行く夏枝を眺めながら、啓造は来客のこと

に一言も触れない妻にこだわっていた。

「客があったのか」

と、さりげなく気軽に問うことが、もはや啓造にはできなかった。

「村井か、高木か」

彼の留守に通す男客といえば、この二人しかない筈である。

高木雄二郎は産婦人科医で、札幌の総合病院に勤めていた。啓造の学生時代からの親友である。高木は学生時代、

夏枝を嫁にもらいたいと夏枝の父に願い出た。夏枝の父津川教授は、内科の神様といわれ、啓造や高木の学生時代の恩師であった。

「夏枝の嫁ぎ先は考えてある」

と断わられた高木は、

「それは誰です。辻口ですか、奴ならおれは諦める。しかし他の奴だったら絶対諦めません」

と大声でどなったと啓造は夏枝からも、高木本人からも聞いていた。

高木は目鼻立ちの造りな豪放磊落型の男であった。時時ひょっこりと札幌から出て来て、病院に啓造を訪ねると、「これからお前のシェーン（美人）なフラウ（奥さん）を口説きに行くがいいか？」

などと冗談をいう独身の男だった。

(高木が訪ねてきたのならいいんだ)

高木はさっぱりした気性で、夏枝のことなど、とうに忘れていたらしい。どういふ風の吹き回しか、専門外の乳児院の囑託をやり、

「おれには、結婚しなくても、子供だけはゴシヤマンといふぞ」

と結構楽しそうに暮している。

(高木は今日札幌で会って来たばかりだ。すると訪問客はやはり村井か)

啓造は不安になった。

(村井が来たと素直にいえな何かやましいことがあったのだろうか)

彼は暗い表情になって、窓外のストロープ林に目をやった。

(うん……辰子さんかも知れない。あの人も煙草は喫う)

資産家の一人娘藤尾辰子は、夏枝と同じ二十六歳、女学校時代からの夏枝の友人で、日本舞踊の師匠である。

(あの人は応接室など入らない)

啓造はいらいらと一人思い感っていた。

勝手口に女中の次子と幼い徹の声がした。徹の何かいっ

て笑う澄んだ声がきこえて来た。

(映画から帰ったのか)

そう思いながら啓造は応接室を出て茶の間に行った。夏枝と次子は台所にいるらしく、徹は茶の間のソファに腹ばいになっていた。

「おとうさん、帰ってたの？ あのね、おとうさん、ぼくアメリカの兵隊さんになろうかな」

「どうして？」

啓造は、今日の来客は村井にちがいないと思ひながら、徹の傍に腰をおろした。

「うん。アメリカの兵隊さんね、とっても勇ましいの。機関銃をダダダ……と射つとね、敵がバタバタ死ぬんだよ」

「ふーん、戦争映画かい」

啓造はいやな顔をした。

「敵はみんな死ぬんだ。だけど死ぬって、どんなこと？」

死んだらいつ動くの？」

「死んだら、もう動けないねえ」

「おとうさんが注射したら動く？」

「いや、どんなに沢山注射しても動かない。もうごはんも食べないし、話もしないよ」

「うーん。死ぬっていやだなあ。でも敵は死んでもいいんだね。だけど、敵ってナーニ？ おとうさん」